

独・白・仏列車行記 (2007年9月18日～26日)

ドイツ(独逸)からベルギー(白耳義)経由でフランス(仏蘭西)へ列車で移動した記録です。途中のベルギーでは週末をブリュッセルとブリュージュをそぞろ歩きました。例によって、ボキャブラリー不足と事実誤認あしからず。

9月18日(火) 曇り、ドイツも曇り

朝 6:43 水戸駅南口発成田空港行きバス(ローズライナー: ¥3,000)。別の部署の同僚と同じバス。彼はブラハへとのこと。

日本航空は第1ターミナル。チェックインに問題なし。缶詰の金属缶はOKらしい。携帯電話レンタルへ。過去2回借りた会社と受付デスクの場所を忘れてしまった。とりあえずDocomoへ。列をなしていたのであきらめる。KDDIとNOKIAではヨーロッパ向けはすべてレンタル中で在庫なし。Softbankで借りる。後で気がついたのだが以前借りた店はTelecom Squareだった。

履いていった靴下が緩くて歩いているうちに脱げてしまう。UNIQLOで3足¥990で買い、試着室で履き替える。

出国ゲートでヘアムースを没収される。100cc以下でないとダメとのこと。ムースは150gだったのだ。gとccは同じ…?結局免税みやげ物店でヘアスプレーを購入。

搭乗を待つ間に近くに座っていたビジネスマンらしい客に、フランクフルト空港からケルン行きの電車の乗り方を聞く。以前は、空港からフランクフルト中央駅まで京浜東北線のようなローカル線がつかないでいて乗り換えたが、今は空港駅から直接Inter City Express(ICE、新幹線のようなもの)が出ているとのこと。

飛行機の中では(というかローズライナーからだが)珍しくやたらと眠い。それと明日のプレゼンの原稿読み。

飛行機の中で、立川志の輔の落語『新・八五郎出世』を聞く。バンコクでの講演会。バンコクは東京から4時間、日帰りが出来るらしい。

うまい。『八五郎出世』はもともと人情噺だが、最後に八五郎が士分に取り立てられるところ、母親には井戸端が必要だとして士分取り立てを断ると筋を変えている。山田洋次監督の寅さんは八五郎のイメージらしい。

映画は『スウィングガールズ』。上野樹里とかいう子が好演。

さあ、初めてのフランクフルト空港。気温13°C。出国審査を終えてからバゲージ・クレームの場所までが長いのがこの空港の特徴か。キョロ

キョロしながらも問題なく荷物を確保。荷物を待つ間にAMEX窓口でトラベラーズ・チェックを現金化できると東京の旅行社の担当者は言っていたが、バゲージ・クレームにそのような窓口はない。仕方なく外へ出て両替。300 Euroから8 Euroを手数料として取られる。

鉄道の駅までは空港建屋内の続き。切符の買い方など調べて来なかったのでチケットセンターとかいところへ。そこで切符を買うことが出来た。ケルン行きICEは10分後。結構歩いて7番ホームへ。表示がわかりやすいので助かる。

初めてのドイツ鉄道。車内内装はきれいで簡素でセンスがある。景色はフランスでも見られるようななだらかな平野。ところどころに風力発電の風車が立っている。ふと電光掲示を見ると時速293kmの表示。車窓から見える車道もアウトバーンで時速200kmが許されているから、ドイツは高速運輸の国だ。

列車はフランクフルト空港 17:35 発ケルン 18:34 着。191kmを59分、ほぼ1時間。これで2等車(自由席)56ユーロ(Euro)(¥8,120)は高いのか安いのか。ちなみに指定席の1等車は88 Euro(¥12,760)。ケルンはドイツ語ではKölnだが、英語つづりはCologne、ということ今回初めて知った。ケルン、コロン。

ケルン到着。タクシーが迎えに来るまで1時間以上あるので、駅構内をぐるっと一回り。あまり大きな駅ではない。一角にはソーセージやらコーヒーやら何やら食欲をそそる臭いが漂い、退勤途中の客で賑う。

タクシーが迎えに来る約束のルフトハンザ航空のチェックインカウンター前で待つ。その間にこのメモを書き始める。約束の時間19:40に若い運転手が目の前に立っていたので声をかけ、タクシーへ。Jülich(ユーリッヒ)のホテルKaiserhof(カイザーホフ)まで約1時間で到着。最高時速は160kmだった。

9月18日21時。水戸の我が家を出てから21.5時間。成田着までに3時間、離陸までに2.5時間、フランクフルト空港到着までに12時間、電車に乗るまでに1時間、乗ってケルン駅までに1時間、タクシー待ち1時間、ホテルまで1時間。

小綺麗なホテル。食堂などはちょっと風格があり、日本の駅前のビジネスホテルの明るい安普請ではない。しかしいかんせん古い。受付はコンピュータ化されてない。チェックインし、2Fの29号室へ。寝るだけなら快適。木製の小振りの机に、鍵が掛かる木製のドレッサー。ハンガーは揃っていないで寄せ



1990年東西ドイツが統一され、国旗は西ドイツのものを使用。3色の色は、19世紀ドイツ統一運動の時に学生義勇軍が着ていた黒いマント、赤い肩章、金ボタンに由来。人口8,270万人、面積は日本とほぼ同じ。

集め。ハンガーにもタオルにも石けんにもホテル名などは印刷されていないそのようなホテル。

入った瞬間マズイ、と。電子メールを読めないのではないか。そこに3日も居るのかと思うと途方に暮れる。ホテルに聞くと無線 LAN がある。パスワードを渡してくれて通信成功。Internet に接続。無料で使い放題。PC の設定がおかしくなっていて、困ったときの神頼み、国際携帯電話で日本にいる同僚の I 君に連絡を取り OK。みやげのひとつも買って帰ろう。奥さん宛のブルーベリーのお礼もあることだし。

荷物を解き、ほとんどをドレッサーの中へ。収納スペースがデカくて助かる。

それにしてもこの部屋は寒い。暖房は？エアコンの通気口もないようだ。どうなるのか。ともかくコートを持って来て助かった。

疲れた。食欲はないので夕食はパス。浴槽に湯を張ってゆっくりと入る。備えてあるのは固型石けんとおそらくクリーム状の石けん。広くて清潔ではある。難点は明かりをつけてしばらくするとスイッチが入る換気扇の音がやたらうるさいこと。

明日のプレゼンの準備と練習。今頃になってまだ原稿を書き、スライドの一部を修正している。準備不足も甚だしい。こんなはずではなかった。

眠くなったので寝る。ベッドは広くはないが一人用としては問題ない。むしろホテルの女主人のように大きな人では困るだろう。

9月19日(水) 快晴

朝は5時頃に目が覚めた。早速メールに向かい、あとはひたすらプレゼンの準備・練習。8時頃朝食。黒パンがうれしい。チーズとハムをはさんで食べる。あと2回の朝食もこれだった。何種類かのチーズと何種類かのパン。なぜかジャムは幾種類も用意してあったが、きっと賄いのおばさんがジャム作りが得意なのだろう。あとはシリアルとでかいカップのヨーグルト。

昼食は抜き。時差ぼけのせいか食欲がない。それに食べている時間がなかった。

12:45 にワークショップ会場行きのバスがホテルに迎えに来ることになっていた。だが待てど来ない。そのバスを待っていたのは僕を含めて3人。結局ホテルの計らいでタクシーを呼ぶ。天気は快晴。

スウェーデン人の中老の紳士とイタリア系フランス人のおそらく30才くらいの研究者。スウェーデン人はドイツ語がぺらぺらだった。フランス人は、第一言語は母国語のイタリア語、つぎにフランス語、そのつぎに英語、少しのスペイン語。ある程度教育を受けたフランス人の平均か。この春の名古屋の国際会議に来たらしい。それが初めての日本。今は日本びいきになっているよう。

13:30 から 18:00 まで仕事。

フランス人の Ochem (オシエム) さんに会う。講演者だったが以前より痩せていて気がつかなかった。

ずっと以前南仏のカダラシュ研究所で2,3回会った。その後彼は日本大使館へ派遣されていた。4年間在日して2週間前にフランスに戻り、今は南仏のマルクール研究所とパリ郊外のサクレ研究所に週半分半分に勤務、アヴィニオンに住んでいるとのこと。日本通算6年間で日本語は堪能。

夕食は研究所の食堂2Fで主催者によるディナー。日本で言うバイキング形式。フランスだけかと思っていたが、ドイツも社員食堂というのが実に充実している。しかし、おいしいとは思わなかった。ヘビーでオイリー。西洋人がサラダを求めるのはそのためでしょう。チェコ人3人と同席。日本語では3種類の文字があると聞いて全く理解できないと。そうだろうな。

欧州のことになるといつも思うのだが、陸続きの隣国同士というのは一体どういうものか。僕には想像がつかない。もともと別の民族だったチェコ人とスロバキア人が、ソ連かどこかの勝手に合併し、半世紀くらい経ったらまたどこかの大国の都合で分割された。国民は誰も分割など望んでいなかったと。

夜9時にバスでホテルへ戻る。電子メールの相手をして寝る。2,30通のメールの相手をしているだけで疲れる。結局、日本にいてもこうして電子メールの対応で自分の時間の大半が費やされているのではないか。

9月20日(木) 快晴

仕事2日目。

朝8時にバスが迎えに来る。今度は確かに来た。

昼食はまた研究所の食堂。明るいところで見ると清潔で広い食堂であることがよくわかる。今度もまたあまり食欲はなく、トマトソースをかけたマカロニ、茹でた野菜、それにフレンチフライ。まあ、味の予想がつく無難なものを選んだ。茹でた野菜に味はないが、グレービーソースは重いのでやめる。

隣の席にスペイン人の若い男。日本に来たことはないが日本に興味があり、黒澤の『乱』、『影武者』、『七人の侍』などを字幕付きで見たと。日本の伝統文化に憧憬を抱いているよう。

スペインは過去何世紀かに亘って繰り返し周辺国家からの征服を受けてきた。征服者の子孫、それぞれの混血、そしてスペインの原住民の3者から構成されているのが現在のスペインという国家である。ネイティブのスペイン人の肌は浅黒く髪は黒い。スペインに住むブロンズの白人はかつての征服者ゲルマンの子孫であると彼は言う。彼はネイティブらしい。

仕事の会場から食堂まで約20分歩く。森の中にあるような研究所だ。これが従業員4,000人の研究所とは思えない。オシエムさんも今までこの研究所のことを知らなかったらしい。

仕事を終了した4時すぎ、他の3人とともにタクシーでホテルへ。他の3人は自分の車をホテルの駐

車場においていたためにホテルに戻ってきただけで、ホテルにもう一泊するのは僕だけ。おそらく今回のワークショップ参加者 30 名程度の中で、もう一泊するのは僕だけだろう。他の人は今日のうちに自宅へ戻って明日の金曜日は出勤なのだ。名古屋に来たフランス人の彼は、ブリュッセルまでレンタカーで戻り、そこから列車でパリへ向かう。ドイツのエッセンから来ていた人は、ホテルで自分の車に乗り換え、そのまま帰る。スペイン人の彼もブリュッセルまで車で戻り飛行機でマドリッドへ。そういえばスウェーデン人の紳士は、昨朝 6 時半にストックホルム空港を発ち、今日のうちに戻ると言っていた。

まだまだ明るい。7 時くらいまでは明るい。この町へ到着後 2 日を過ぎてようやく町へ出てみた。こじんまりとしたきれいな町だ。夕方の買い物時間だからか子供連れのお母さんの姿が目立つ。しかし公園で子供を遊ばせているのは父親が多いような気がした。ドイツは何か関係のルールがあったような気がする。子供と接するために就業時間を短縮する義務が会社にあるなど。そういえば、ドイツ軍隊は週休 3 日制にするとの話が以前あったが、結局どうなったのだろうか。

Julich (ユーリッヒ) という名前はジュリアス・シーザーに由来するらしい。その昔ローマ軍に占領された。その基地(シタデル)の一部が今も残っている。その横が父親が多い公園。緑、緑、緑。

例によってまずは書店を探し、地図を買う。小さな町にしては店内がひろびろとした書店。西洋の町というのはどうしてこう書店が充実しているのだろうか。絵はがきを入手。観光地ではないので種類はないがシンプルなのを 4 枚。あとはぐるっと電車の駅まで歩く。

観光地なら単なる風景は絵はがきで済みますのだが、小さな町だからかえって歩きながら写真を撮る。30 枚程度になって気がついたのだが、PC へ取り込むためのコネクターを持ってくるのを忘れた。カメラの中で満杯になったらお手上げだ。

ホテルへ。また電子メールの対応やら添付書類のチェックなど。次々と会議やら何やらの依頼が追いかけてきて、日本にいる事務方の人と連絡をとりながらスケジュールを埋めてもらう。便利になったがために仕事から離れられない。

フランスの国際会議に出席中で週末にはパリで合流する同僚・Y 君にコネクターを持っていないかどうかメール。

夕方 7 時頃がやたら眠い。日本時間で夜中の 2 時頃。ベッドに横になる。夕食はパス。

9 月 21 日 (木) ドイツは曇り、ブリュッセルは快晴

夜中の 2 時起床。目が覚めてしまったのと、今日はチェックアウトなのでバックインしなくては行けない。それにまだブリュッセル行きの電車時刻表も見っていない。昨日買った絵はがきのうちの 2 枚で同

僚の N 君の 18 回目の結婚記念日おめでとう。

ユーリッヒは支線の駅で不便なので、始発駅の Düren (デュレン) から電車に乗ることにする。Thomas Cook (トーマス・クック) ヨーロッパ列車時刻表によれば、デュレン 08:14 発、Aachen (アーヘン) 08:49 着ローカル線。アーヘンで国際 ICE 09:21 発に乗り換え、Brussels (ブリュッセル) 11:01 着が適当。紙に書いておく。それを駅で示せば英語でなくても大丈夫だろう。ホテルからデュレン駅まではタクシーで 30 分と聞いていたし、デュレン駅ではブリュッセルまでの切符を購入する時間が欲しい。

ちょっと寒いがベストにブレザーで OK。

7 時半にタクシーに迎えに来てもらうようホテルに頼み、チェックアウトを済ます。朝食込みで 3 泊 201 Euro。1 泊 67 Euro (¥9,700)。絵はがきの切手を売って欲しいと言ったら、日本までの料金がわからない、デュレン駅ではわかるだろうとのこと。

15 分くらいで慌てて朝食を掻き込み、終わったらちょうどタクシーが迎えに来た。中年の小柄なおばさん運転手。駅まで 27.50 Euro (¥4,000)。

デュレン駅の切符売りの女性は英語が通じ親切だった。ブリュッセルまで合計 32 Euro (¥4,600)。切符は一枚で、アーヘン→ブリュッセルしか印字されていない。ローカル線の分は 32 Euro には入っているが切符には印字しないのか。それではデュレンから乗車した記録が残らないんじゃないの？

駅構内にある結構大きな本屋の一角にいわれる駅の売店があり、そこで切符を頂戴と。おばさんは、案の定、日本までの料金がわからない。こうして「ユーリッヒに居ます」と書いた N 君宛のはがきはブリュッセルまで持ち込むこととなる。

プラットホームはきれいで明るい。ドイツの駅のプラットホームは造りががっしりしているような気がする。乗った電車はローカル線の普通列車のはずなのに 1 等席、2 等席があって、僕は当然 2 等席に。特急列車に使う車両と共用か？

なんだか故障がちで途中 3 度ほど計画外停車しながらアーヘンへ。アーヘンに近づくにつれ、田園風景は古い町並みへと変わって行く。ポツポツと教会が見える。古いと言っても半端じゃないだろう。15 世紀の建物とかザラにあるのではないか。

アーヘン駅に降りて隣のプラットホームで ICE を待つ。デュレンでもそうだったが、10 分くらいの遅れはあたり前で、国際 ICE でさえ遅れてくる。新幹線のような稠密スケジュールでは考えられない。かつて東京駅に東北新幹線のホームがひとつしかなかったとき、到着してから折り返し発車までに 12 分しかかからなかった。その間に車両点検と車内清掃を済ませた。やはり日本民族は特別だと、その様子を見ていた当時のフランス国鉄幹部が嘆息したとかしなかったとか。

ICE では今度も 2 等席で、隣は高校生くらいの女子 4 人組。しゃべりやむことがないことは万国共通。



フランスの国旗を手本とする。色は伝統的な紋章である黒地に赤い舌を出した黄色いライオンから。北部は低地、南部は丘陵地帯。1830年オランダより独立。住民の多くは、フレミッシュ系(言語はオランダ方言)とワロン系(言語はフランス語方言)とに分れ、第二次大戦後、両者間に言語紛争が起った。人口1,050万人、面積は3万平方km(九州の約80%)。

売り場のお兄さんによると30分くらい。駅の外に出て地図と周りの風景を見比べて見るがどうも掴めない。近くにいた女性に聞いて目の前の通りの名前はわかったが、それから先が不安。荷物があるから後戻りをしたくないのだ。迷った挙げ句タクシー乗り場へ。タクシー乗り場でまた迷う。乗り場が暗いところであって不気味なのである。

タクシーに乗って住所を告げる。どこの首都も同じで道は混み混み。大通りに出たと思ったらトンネルをふたつかみつつ通過し、中心地らしい区域へ。タクシーの大柄で黒人の運ちゃんに迷って到着。11.2 Euro (¥1,600)。ホテル・ド・マドレーヌ。二つ星で朝食込み一泊99 Euro。旅行書の夜景の写真にだまされた気もしないではないが、カフェテラスが囲む広場に面しており、場所的に至便であることがあとでわかる。

正午頃に到着したのだが、チェックインは午後3:15ということで荷物だけ預ける。3時間ばかり外で過ごさないといけない。受付のお兄さんは「切手は?」「No.」「トラベラーズ・チェックは・・・?」「No.」と素っ気ない。

快晴で暑いくらいだが、ポケットがあると便利なのでブレザーを着て外へ。昼食時間だが今はまだ食欲がない。しかし、ホテルから20歩ほど歩いたところのカフェテラスでおいしそうにビールを飲んでいるのを見て真似する。金曜の午後の道行く人を眺めながらPrius 50cl, 5.2 Euroでゆったりといい気分。(clはセンチリットルだからリットルの100分の1、つまり10cc。50clは500ccで「おっ、飲みがいがあんな感じ。)

大学時代の同級生に教えてもらったムール貝の店 Chez Léon の場所を探しに行く。今日の夕食はそ

車窓風景はまた田園に変わり、田園が古くて結構汚い町並みに変わり、1時間半ばかりでブリュッセル。ブリュッセル北駅、中央駅を過ぎて終点南駅へ。アーヘンブリュッセル南駅間154km。

北駅も中央駅もプラットホームが汚い。汚いというのはゴミが散らばっているというわけではなく、古い。古くて至るところが傷んでいるにもかかわらず直していない。南駅も同じ。夜は怖くて近づけないと思った。ドイツと明らかに違う。新幹線の駅でこんなに汚い駅はないぞ。南駅は国際駅だからさすがにコンコースは大きい。暗い。

中央駅の近くにあるホテルまで歩こうかと、まずは駅のコンビニで地図を買う(4 Euro)。

こと決めている。位置的にはホテルの裏手の路地街。驚いたことにその一角はムール貝を食べさせる店がびっしりと文字通り軒を連ねている。100軒くらいあるかも知れない。 Chez Léon はその中の一軒に過ぎない。昼食時で大いに賑わっていた。

ホテルのすぐ横手は美しいガラス張りの屋根のアーケードで、ブティックやチョコレート的高级店が並ぶ。 Galeries St-Hubert (ギャラリー・サンテュベール) と言い、旅行書によれば、1846年完成の欧州最古のショッピングアーケードだそう。土産物屋を見つけ、絵はがきを買う。絵はがきだけで30 Euro (¥4,500)。ここでようやく切手を書くことが出来て同僚N君へはがきを投函。

行き当たりばったりの「徒歩観光」開始。

市庁舎の前がグラン・パレスとかいう観光ルートの拠点。観光書にはお奨めモデルコースというものも紹介されていたが、無視して地図を片手にアチコチアチコチ。さっき通ったよなと思いつつ。ああそう言えば小便小僧もあつた。世界的に有名な。中年以上のグループ旅行が結構目立つ。米国人か。アーヘンの駅でも同じ電車を待つ老人の一行があつた。英語をしゃべっていた。日本人もポツポツと。若い女性の二人連れか、あとはツアー参加の家族連れといった感じ。

ベルギー公園からホテル方向に戻ろうとして、来たときは違う道と思ったのが間違いで迷った。標識の通りの名前が地図上で見つからない。通りがかりの人に聞いた道は全く逆方向だった。その間違った道でインテリアショップにカメラを向ける若い女性とすれ違う。今でもバックパッカーは居るのか。背中には野宿用のシートを背負っていた。

中心部分を歩いて町並みを見た限りでは、僕の印象はプチ・パリですね。博物館とか教会とかを訪れれば少しは違いもわかるのだろうが、とにかく勉強不足。どこに行ったらいいのかも事前知識なし。

まあ、そんなことをやっているうちに3時過ぎになった。ホテルにたどり着き正式にチェックイン。受付の人はさっきの素っ気ない白人から、おそらく北アフリカ系の若者に交替していた。今度の彼はすこぶる愛想がいい。ネクタイをした格好も決まっている。Internet利用を申し込む。11 Euro/24時間。日曜日はノーカーデーなので気をつけろと言われたが、レンタカーで来ているわけではないので、僕は関係ない。しかしタクシーも使えないのか?もしそうなら、帰りは南駅ではなくて近くの中央駅から列車に乗車するしかない。

部屋は2階。2階へ上がって面白い。廊下は狭く曲がりくねって一部起伏がある。とても荷物をがらと引いていける状態ではない。途中で荷物を置いて部屋を探しに行ったほどだ。部屋は3人までは泊まれる部屋で広い。床はカーペットの下は木張りでギシギシと鳴る。しかし快適、快適。窓からは広場を右斜め前に見、その広場に通ずる道にこの部屋

は面している。荷物の整理を少しと早速の電子メールチェック。

昼食を抜いてようやく食欲もわいてきたことだし、**Chez Léon** へ。5時過ぎで客はまだまばら。少し離れた席におそらく日本人の旅行者風若者が一人。食べるものは決めていて、ムール貝ボール1杯＋フレンチフライ皿のセット。バゲット数切れは付け合わせ。それにビールグラス1杯、ワッフル、エスプレッソ1杯を追加。32.30 Euro プラスチップ2.70で締めて35 Euro (¥5,100)。ワッフルはでかい上に、生クリームとキャラメルがかかったアイスクリーム。カロリーたっぷり。フレンチフライ発祥はベルギーで、マヨネーズにディップしながら食べるのがベルギー流と聞いていたが、**Chez Léon** ではマヨネーズはついて来なかった。

ここでアメリカの**Roland** (ローランド) と**Jude** (ジュード) にはがきを書く。旅先から彼ら夫妻に絵はがきを書くのは恒例になっている。そう言えば娘の**Dante** (ダンテ) はこの秋からカナダ (モントリオール?) の大学に進学したから、夫婦だけの生活に戻っているはず。はがきは4枚にもなった。

9月22日(土) 今日快晴

今日は「天井のない美術館」**Brugge** (ブルージュ) へ向かう。ブリュッセルから西方へ電車で1時間の小都市。

朝食はホテルで。昨日までとは打って変わって、ここはフランス風である。つまり、テーブルの上にはクロワッサン一切れとバゲット風1個とコーヒーカップが用意してある。おばさんにコーヒーを頼む。一角にシリアル3種類、ジュース2種類、ミルク、ジャム2種類、ボールにプレーンヨーグルト、リンゴがおいてある。

服装は緑のセーターにハーフコート。

中央駅へ。中央駅と言うだけあってこちらでよく見る石造りの立派な建物。そう、映画『アンタッチャブル』でケビン・コスナーとアンディ・ガルシアがマフィアの会計係を射殺するシーンに出てくるような。切符の自動販売機がないらしく、みんな窓口販売。ブルージュ往復 12.80 Euro (¥1,850) 也。

ホームはすべて地下で、6番線へ。他のプラットホームで工事をしているらしいこと甚だしい。30分に1本しかない電車が10分程度遅れていても構わないが、時刻表上で5分おきくらいに発着するはずの電車が遅れ遅れになっていると、どれに乗っていいか気をつけないとイケない。ホームはやたらと混雑していて、不吉な予感が。

その予感はあたり、ブルージュまで立ちっぱなしとなった。それも客室に入れずにデッキである。2等席だからこうなる。おまけに週末と来ている。電車の種類はよくわからない。時々駅をすっ飛ばしていたように思うから全くの普通列車ではないようだ。途中の駅でアントワープから来た列車から乗り換え

てブルージュへ向かう乗客が合流し、混雑は極み。老若男女。

ということは、ブルージュは観光客でごった返しているということだ。外国向けの観光書にまで紹介されているのだから、当たり前と言えは当たり前だが、観光でもっている町だ、ということは町を散策してみたてわかった。

おまけに。時刻表では10:00ブリュッセル南駅発、11:01ブルージュ着とあったが、結局到着は11時半過ぎ。ブルージュは乗り過ごしたかと途中心配になったほどだ。

立ちっ放しで疲れたので駅前のベンチで一休み。眺めていると結構日本人が同じ電車に乗っていたよう。

ここでもまたブリュッセルと同じく何の事前知識もなしに地図を片手に歩き始める。町全体がすっぽりと観光地と言う感じだが、生活している人たちもいるはずで、彼らは一体どこにいるのだろう。

ひとつだけ目当てがあった。ミケランジェロの聖母子像がこのブルージュにある。それは見ておいた方がいいと、ドイツにいたときチェコ人の女性が言っていた。聖母マリア教会。奥の博物館¹に2.5 Euro。小規模ながらステンドグラスが美しい。日本で言う参道は土産物店通り。ポピンレースが有名で、その店とチョコレート屋さんが圧倒的に多い。コンビニで絵はがき(12 Euro)とミネラルウォーターと切手とブルージュの日本語観光ガイドブックを買う。ここでローランド・ジュード夫妻への絵はがきを投函。

馬車が行き交う。水の都なので運河クルーズに乗ってみようかと思ったが、団体客が列をなしていたのでやめた。見ていると丸々一艘日本人ツアーの船があった。

聖母マリア教会は塔の高さが118mもあるのでそれを目当てに駅から歩いてきたのだが、途中で病院(聖ヤンス病院)があって敷地内は観光客が入れるようになっていた。いつ頃の建築か知らないが古めかしく、けれど今でも使っていそうな建物。

市庁舎のあるマルクト広場へ。よく絵はがきなどに使われている(今回も買ったが)、幅の狭い、同じ高さの三角屋根の3階建てくらいの建物が並んで、1階部分にカフェやら菓子屋が入った風景はこのマルクト広場に面する絵がオリジナルではないか、と思えるくらいで、微笑ましい。

昼食は、広場の屋台で、(ついに!) フレンチフライのマヨネーズかけ、2.5 Euro。スペイン語かポルトガル語を話す夫婦者らしい二人がやっている店。繁盛していた。ベルギーへ来て広場の屋台でフレンチフライを買って食べる、とどこの国の旅行書にも書いてあるのだ、きっと。

今度は観光エリアの周辺部に近い、高級店がならぶ通りを歩き、途中からぐいっと中心部に入り、先

¹ 旅行書によるとブルゴーニュ公国のシャルル豪胆王とその娘マリーの霊廟。一瞬ミイラかと思った。

の聖母マリア教会へ続く参道をかすめ、デートスポットと言われる愛の湖公園へ。想像通り誰もデートには来ないだろう。少なくとも明るいうちは。湖上は運河クルーズが行き交い、湖畔は馬車と徒歩客が行き来する。日本で言えばシーズン中の京都・嵐山か。ベンチに腰掛け同僚の A 君夫妻に結婚 16 周年おめでとうのはがきを書く。

15:35 発の電車でブリュッセルに戻るべく、ペギン修道院（これは思ったより大きく、もっとよく観察する価値有り）の脇を通って、ブルージュ駅へ戻る。

駅で日本人の若い女性の二人づれ。ブルージュに滞在したのか大きな荷物をもって。彼女たちはお金をかけたゆったりタイプの旅行だろう。駅のトイレ 0.40 Euro。

今度の電車は座れた。よかった、よかった。座って車窓を眺めていて気づいたのだが、沿線は畜産農家が多い。しょっちゅう牛が見える。

ブリュッセル南駅へ到着。残りのトラベラーズ・チェック 300 Euro を現金化。手数料なし。明日の帰りにチョコレートを買おうと思うので店の位置をチェック。

今日は南駅からホテルまで歩いてみた。昨日は歩かなくて正解だった。道は石畳で歩道は狭いので、カートが壊れるだろう。身軽である場合は歩くのにちょうどいい距離。途中から旧市街、つまりホテルがあるエリアに近づき、賑やかになる。たまたま PLANETE CHOCOLATE の店を見つけたのでチョコレートを買う。Orangette というのはオレンジピールのことだろうか。6 Euro。もうひとつと合わせて 12 Euro。

明日の電車の切符を予約するために中央駅へ。中央駅→南駅、南駅で特急 THALYS（タリス）に乗り換えて→パリ北駅へ。ここでも紙に書いて示す。タリスはパリを拠点にブリュッセル、アムステルダム、ケルンを結ぶフランス国鉄の国際特急列車。同じパリを拠点とするフランスの TGV は、ミラノ、チューリッヒ、ジュネーブ、ブリュッセルを結ぶ。ドイツで乗った ICE はドイツ主要都市とアムステルダム、チューリッヒ、ウイーンなど。EUROSTAR（ユーロスター）はロンドン拠点でパリ、ブリュッセルへ。それぞれ国の威信をかけて開発した国際特急列車。どれも 1 等席、2 等席があり全席予約必要。タリス 2 等席で 78 Euro。今回の切符もブリュッセル南駅からパリ北駅の特急列車区間しか記載がない。そういうものか。

これだけ準備しておいて今夜もまたムール貝へ。Chez Léon とは別の、調子のいいボーイのいる店へ。実は昨日の Chez Léon で、ムール貝のスープとしてカレー味があったのが気になっていたの、それがメニューにある店を選んだ。ムール貝にフレンチフライの付け合わせ。ビールは 2 杯。確か 27 Euro を払った。

ホテルに戻って 8 時頃。すっかり疲れた。夜中に

通りの声で目が覚める。町中だから若者が夜中まで彷徨き奇声を挙げる。ずっと以前マドリッドで泊まったホテルを思い出した。僕の部屋はその大きなホテルの玄関の真上で、近くの広場にたむろする若者がうるさかった。おまけに朝の 5 時頃に出発するバスツアーに集合した米国人老人ツアーがうるさくてうるさくて。このことを後でジュードに言ったが、彼女はいつまでもそれを覚えているようだ。今夜の奇声はおとなしいものだ。これも都会風で悪かない。

9 月 23 日（金）ブリュッセルは曇り、パリは晴れ
パリへ移動する日。

今までと違って朝はゆっくり 7 時頃に起き出し、荷物をまとめる。パリの Delphine（デルフィーヌ）へのみやげを手持ち鞆の方に移しておくのを忘れてはいけない。

デジタルカメラのメモリーは何とかもっている。昨日のブルージュの写真のうち数枚を消してあと 9 枚は撮影可。バッテリーもまだ大丈夫そう。

10 時前、教会の鐘がなっている。

Delphine に電話するも通じない。携帯電話はコールの途中で切れる。家の電話は留守番電話。

11 時半ホテルをチェックアウト。中央駅へ。電光掲示の時刻表を見ると 5 分後に出る電車がある。すぐに地下 6 番ホームへ。一駅乗って南駅。コンビニで水（1.6 Euro）、土産チョコレートショップでノイハウスを二箱（31 Euro）。待合室でチョコレートを旅行バッグの方に詰め込む。

30 分前くらいに早々と 6 番ホームへ上がる。15 号車 65 番が切符に示された僕の予約席なのだが、車両位置を確かめようと思ってもホームには何の表示もない。Zone A1, Zone B1, Zone B2, Zone B3 という表示はあって、聞くと Zone A1 が 1 等席らしい。だから僕の席は B1~B3 のどこかなのだろう。離れたところに乗り込んでしまって大きな荷物を持って車内を移動するのは大変だし、おそらく不可能。みんなが動くのだから。

先頭車両から 2 番目か 3 番目の「2」（等席）という表示のある車両にエイヤと乗り込む。見ると幸いなことに 16 号車のデッキ。ということは 15 号車はひとつ後ろである。荷物を目の前の荷物置き場において後は 65 番席を探せばよい。ラッキー…と思ったのは早合点で、65 番席が見つからない。その車両を通り抜けて見てわかったのだが、15 ではなくて 17 号車である。つまり、先頭から 2 両目か 3 両目に乗ったが、この列車の車両番号のつけ方は、先頭から 14, 15, 16, 17 号車…なのだった。

2 両戻ってようやく見つけた 65 番席に腰を降ろす。とてもじゃないが一旦荷物置き場においたバッグを運びながら移動する気にはなれない。間違っても 17 号車を通り抜けたときも、17 から 16, 15 と戻ってきたときも、大きな荷物を持った客同士が通路を歩き違うので、なかなか身動きがとれない。2 等車だか

らこうなのだろう。車両の中央通路が新幹線より明らかに狭い気がする。椅子は4列、椅子の幅が西洋人向けに新幹線より広いとしても、新幹線は5列席でそれでも中央通路は広い。車両幅自体も新幹線の方が広い。とにかく、やっぱり1等席にするべきだった。

乗車中は車窓を眺めながら過ごす。なだらかな田園風景。のどか。ブリュッセル南駅からパリ北駅までノンストップ。いやそれどころか途中で駅を通過した覚えがない。国土が広いとこのような専用路線を作れる。

車内放送は4ヶ国語である。公用語のオランダ語、フランス語、ドイツ語、そして英語。最後の3ヶ国語は区別がついたので残りがオランダ語だったはず。最後の英語で「sandwich」という単語が聞こえたので車内販売のことだろう。

今度はほぼ時間通り14時過ぎにパリ北駅へ。座席から離れた荷物置き場に荷物をおいていたので、盗まれないか少々気がかりだったが無事だった。

デルフィーヌの電話は相変わらず通じない。自宅電話は留守番電話で、「伝言がある場合は・・・」とフランス語でおそらく言っているのだろう。「約束通り6時に待つ」と伝言を入れる。

合流するY君と待ち合わせたホテルKyriadは市内の南の方、モンパルナス駅の南にあるらしい。そこで6時にデルフィーヌに拾ってもらい約束をしている。(なぜこのホテルを待ち合わせ場所に決めたのか忘れてしまった。)

駅の売店で地図を買い(4 Euro)、通りの位置を確認。遅い昼食として駅構内でチキンサンドイッチとマフィン各1個を買い(6.2 Euro)タクシーへ乗り込む。目的地まで20分程度とのこと。市内の細い道をくねくね通り、ほどなくホテルへ。25.4 Euro。タクシーの中でチキンサンドイッチとマフィンをムシャムシャ食べていたので、降りたらすぐに運転手がタオルではたいていた。こちらを向いてイヤな顔をしていた。チップを渡さなかったのも悪かったか。ずっと以前はチップを渡していたのだが、いつかパリではチップ不要とフランス人から聞いた。後で誰かに聞いたらやはり5%くらいは渡した方がいいとのこと。



フランス革命の革命軍の帽章の色から作られた。青は自由を、白は平等を、赤は博愛を表す。人口6,090万人、面積55万平方km(日本の約1.5倍)。

Kyriadホテルのカウンターには若い恰幅のいい黒人の従業員。親切にも6時まで荷物は預かってくれるとのこと。小さい方のバッグを持ってセーヌ河まででも散歩に行こう、あわよくば今まで2度振られているオランジェリー美術館へも、と歩き出したが、荷物が意外に重く、セーヌまでは意外と遠く、おまけに陽が射して来て暑い。小一時間ぐるっと辺りを歩いてホテルへ戻

る。4時。この散歩の途中にデルフィーヌから電話が入り、ようやく連絡が着く。

ホテルのロビーでは、TVでラグビーのワールド・カップに見入っている先の従業員と、ラグビーなどにはいささかの興味もなさそうな手持ちぶさたの老女の間の椅子に腰掛け、双方をチラチラ見ながら文庫本を読む。6時までこうして時間をつぶすのは時間の無駄と思い、デルフィーヌに電話をしてもっと早く出てこいと。家から遠いので5時より前には着けないとのこと。

5時ちょっと過ぎ、彼女現わる。黒のジーンズにエンジのハーフコート、髪は赤紫に染めている。緑色のバッグを肩に掛けている。颯爽としている感じ。

歩きながら、この週末はパリを離れていて今日3時頃戻ってきた、留守番電話に気づいたが、どうして携帯に電話して来なかったのかと聞くので、ダイヤルしたが通じなかったと答えつつ電話番号を確認すると僕の記録間違い。

少し離れた通りのカフェでビール。

ホテルに戻ってY君と合流。いよいよ彼女の車でレストランへ向かうことに。

パリでの食事にはまだまだ早い時間だと言うので、即席のパリ市内案内。彼女はパリへ来て10年。都会生活を満喫している感じだ。市内を知り尽くしている。サン・ミッシェル通りを少し北上、ルクサンブール(ルクセンブルグ)教会を左に見て脇道に入り、パリ高等学院、パンテオン、ソルボンヌ大学という文教地区を抜け、サン・ミッシェル通りに戻ってサン・チャペルの前を通り、ここでセーヌ河を渡る。ポンピドーセンターを右手に見て、覚えていないどこかの道を抜け、セーヌ河沿いの無印良品も出店する何とか言う高級品店街を通り抜け、バスチーユへ。日曜日の夕方のパリはどこも観光客で賑わう。

バスチーユから路地を入ればそろそろ東地区。ここはアラブ系の人たちの地区である。僕はまだ足を踏み入れたことがない。ベルビル通りを北上。本当に知らないところだ。道の両側には蚤の市。規模がでかい。見て歩くのは一興だろう。

彼女は「街がクリーンでない」と言っていたが、確かに道にはゴミが散らばっている。しかしさほどではない。

非常にラッキーなことに駐車スペースを見つけ、そこいらを歩く。まだ7時。早い。またカフェに入ってビール。25clの値段で50clのグラスのタイムサービス中。暗くなり始めた頃店の物色始める。Oberkampfとかいう通りらしい²。日本にいるときウェブサイトを覗いて見たらおしゃれな通りのよう。彼女は、歩きながら、ある程度の金銭的余裕がある

² Rue Oberkampf: 手持ちの旅行書によると「今注目のオーベルカンフ周辺を歩く」というコラムがあり、「粋なバスチーユの賑わいが北上し、忘れかけられていた下町が大変貌。今、オーベルカンフ通りが最も熱い」と紹介されている、ことを帰国後に知る。

恋人や夫婦が行きつけるような店を選んで紹介してくれる。「週末のボーイフレンドとの食事はこの店から始めるの」とバーのような店を指差す。「あっそう」。

ビール2杯で少し回り始めた僕の頭ではよく吟味して選ぶということが面倒になってきている。彼女の勧める店へ。

天井が高く広々としている。1Fの隅のテーブルへ。彼女によるメニューの説明が始まる。tartar というのは調理していないという意味だそうで、Y君は何かで経験したらしく、tartarの牛肉を頼んでいた。僕は、これもY君が食べたことがあるという「ソーセージのようなもの」を注文。飲み物はまたもやビールだったかな。彼女はビールが好きなのだ。

料理が運ばれて来るまでに彼女へのおみやげを手渡す。日本を発つ前に彼女から聞き出した希望の品は、「小袋に茶色いクッキーのようなものやら乾燥した小魚が入っていて、その小袋がまた大きな袋に入っている」というもので、いわゆるお徳用のビールのつまみと解釈。水戸の京成デパートに同じ物はなかったが、イワシのみりん漬けの乾燥を一袋と、オイル・サーディンならぬイワシの缶詰め一缶を、最近はやりの飾り物にもなる日本手ぬぐい3本と竹のつまようじセットと組み合わせて、デルフィーヌのために無理矢理詰め物にしてもらった。手ぬぐいのひとつは中秋の名月の季節物で、月とウサギの絵。これは何とか説明。しかし、のし紙(のし紙まで付けたのだ!)の「熨斗」は何のシンボルかと聞かれてハタと困った。不幸な場合には見たことがないから、happinessの意味だと言っておいたがどうか。笑う彼女の写真を撮る。

料理が運ばれてきた。Y君のを見ると、焼く前のハンバーグのようだ。直径は10センチくらい。その周りにフレンチフライ。彼女はサラダのようなもの。僕のはゴツゴツしたぶっといソーセージのようなもの。ナイフを入れるとぷんと匂う。これは好き嫌いがあるだろう。僕は平気だがもう一度食べてみようとは思わない。僕らが知っているソーセージは中身が均質だが、これはそうではない。写真を撮ればよかったのだが、間の悪いことに、今まで何とかもっていたバッテリーがここへ来てなくなってしまった。残念。

ソーセージは3分の1ほどを残す。おながが相当いっぱいになってきていたのだ。結局飲み物のお代わりもせず、11時頃切り上げる。フランス人と夕食をすると日本人を物足りなく感じるだろう。時差ぼけや移動で疲れていることもあるのだが、夜中まで食卓を囲む習慣がないので、疲れてきて会話も途絶えがちになる。

102 Euro。僕のVISAカードで払おうとしたらパスワードが違くと。3回受け付けられず×。Y君が払う。帰国してから三井住友Visa card社に問い合わせをする。パスワードは郵便で送られてくるそうだ。

さて、店を出てから最後にもう1軒と彼女。「ま

だ!？」。店を探す前にアラブのお菓子を売る店の前へ。確か以前食べたことがあると思うが、とても甘い、砂糖が90%入っているのではないかと思えるようなあのお菓子か。いろんな種類が山のようにあり、繁盛している。試してみたい気持ちはあるが、腹一杯でとてもとても食欲は湧かず、買う気になれない。デルフィーヌが少しだけ買ってくれた。試食用にもらってくれたのか、ひとかけらを食べる。おいしいと思うがやはり甘くて1個で十分。その後カフェへ。コココーラで済ます。

車に戻って、明日の仕事がある郊外の研究所近くのホテルへ。NOVOTEL(ノボテル)チェーンのNOVOTEL Saclay(サクレイ)。サクレイは研究所がある地区。

彼女たちはやはり酔わない体質なのだ。日曜夜のほとんど車の通らない走りやすそうな道を、30分くらいひた走る。12時前後に到着。僕らのチェックインが遅くなることを、あらかじめデルフィーヌが電話を入れてくれていた。至れり尽くせり、感謝します。荷物を降ろして「See you on Tuesday」。今度は仕事で会う。

9月24日(月)曇り時々雨

このホテルの朝食は、席に着くとコーヒーかミルクかカフェオーレかと聞いてくるのがフランスっぽいだけで、パンはクロワッサンとチョコチップの入ったよくあるパンとあと2種類くらい。スクランブルエッグとソーセージが暖めてあるなどアメリカっぽいし、最近では日本でもなじみ。僕は食パンを焼いてハムとチーズを挟む。あとヨーグルト。まあサクレイ村に観光に来る人などいないから、このホテルは世界中からの研究所来訪者用だろう。誰でも食べられるものを用意しておくのだ。

朝8:30にタクシーで迎えに来てサクレイ研究所へ。例によってセキュリティでパスポートを接收され、バッジを渡される。その場で写真を撮られパウチしてバッジを作るのだが、僕は写真を撮られなかった。渡されたバッジを見ると前回訪問時の写真を使っていた。パソコン持ち込みは要申請。カメラは取り上げられる。

9時から12時半まで仕事。こちら側参加者は5人(Kさん、S君、I君、Y君、私)。

12時半から昼食。食堂へ行こうと思ったら雨が降ってきた。今回の旅行で初めての雨だ。聞くと今年のパリの夏は悲惨だったらしい。雨が多く34年ぶりに記録を更新したとか。僕は会うたびごとに「日本はクレージーな夏で、東京近郊のある町では記録更新、42℃だった」と言っていた。

フランスの食事ではワインから始まるのは避けられないのだ。チーズがなくて助かった。チーズは好きだが、食事前のチーズは胃に来てあまり進まない。前菜のサラダの野菜がおいしかったのは覚えているが、メインに何を食べたか忘れてしまった。

午後は2時から6時半頃まで仕事。最後に実験室見学。以前見たことがある。

夕食は7時からNOVOTELホテルで。フランス側は一日付き合ってくれたリーベン部長とガレ課長、それに日本語ペラペラのオシエムさん。こちらは5人。またまた例によって、立ったまま(本物の!)シャンパンとつまみでおしゃべりをしばらく。日本のあられがあった。本物のシャンパンを出されても僕には猫に小判、豚に真珠だ。味はさっぱりわからない。

メインはcanal。鴨?のステーキ。巨大だった。日本では薄切りしか食べたことがなかった。

フランス人3人はそれぞれ出身地が違う。誰もパリ出身はいない。リーベン部長はパリの北方の町Lille(リール)のさらに北80kmの小さな町だと言っていたが、オシエムさんは「それはイギリスだろ」と。それくらい欧州各国は近い。帰国してからJAF MATEを読んでいたら、現在ユーロスターで4時間かかるパリーロンドン間は、来年にも2時間20分で行くとか。

9時過ぎに散会。その後しばらくロビーで日本人同士で歓談 on コーヒー(2 Euro)。S君だけはパリの知り合い(昔知り合ったタクシーの運転ちゃんらしい)に送り迎えをしてもらってパリ市内に宿泊している。今回彼のフランス語には驚いた。彼は2年間当社パリ事務所に勤務したらしい。ガレさんも驚いていた。

部屋に戻ってひとしきりパソコンに向かう。今日が最後の夜だ。出張中にドイツの会合のレビューと会社へ提出する出張報告書を書いてしまおうと思っていたが、結局何も出来なかった。日本では別件が動いていて同僚が東奔西走している。そのためのメール対応に費やされた。まあ、去年の「新・遠野物語」勃発に比べればうんとマシだ。

9月25日(火)曇り時々晴れ

ホテルをチェックアウト。一泊79.00 Euro×2+Wifi Orange(インターネット)24時間接続9.90 Euro=167.90 Euro。後でY君が言うには、Orange Netに直接登録したら半額の4.5 Euroで接続できたとのこと。

チェックアウトをしている間にタクシーの運転手の女性が近づいてきた。そこへデルフィーヌから電話。タクシーでパリの郊外鉄道RERのフォンテネ・オ・ローズ(Fantenay-aux-Roses: 薔薇の場所、程度の意味)駅まで行くので、そこへ迎えに行くことになっていたが、一気に仕事場の建物までタクシーで来るようにとのこと。タクシーの運転手に携帯電話を渡してデルフィーヌから直接道を教えてもらう。

Y君と8:30ホテル発。ほんの15km程度を1時間かかると昨夜の懇親会でリーベンさんが言っていたが、今日は30分程度でフォンテネへ。この辺りはパリ市内の研究地区で、その昔キュリー夫人も研究したとかしないとか。

さて、案の定、昨年と同じく、タクシーはこの地区の一角までは到着するのだが、目指す建物の正門がわからない。この辺りの入り組んだ、片側にずらりと路上駐車されている道をあちこちあちこち回っているうちに、偶然出勤してきたデルフィーヌの上司のクリストフ(Christophe)に会う。車内から声を掛けて一件落着。ナンバープレートの番号がサクレーだったから僕ではないかと思っていたとのこと。タクシー43 Euro。

昨年とは違うところに新しい入り口が出来ていた。新しい受付(セキュリティ)も立ち上がったばかり。入り口前の駐車場も受付の前の廊下も工事中。

受付でどうも様子がおかしい。聞くと、僕らふたりの来訪のための書面は提出されたはずなのだが、新しく立ち上げたコンピュータに情報が入力されていないうえに、書面が昔の受付から届いていないらしい。つまり、僕らはテロリストでないことを証明できないわけだ。

とりあえずクリストフは僕らに付き合ってくれている必要はないので居室に行ってもらい、ふたりで待つことに。大きな荷物を脇に置いたまま突っ立って待つ。受付のお嬢さんが近くの会議室へ案内してくれてそこで待てと。何だ使えるじゃないか、さっきは使えないと言っていたのに。

会議室へ入った途端クリストフの秘書が迎えに来た。迎えに来たと言ってもそれですぐに受付を通過できるということではなく、ついでデルフィーヌまでもが降りてきた。受付の方も上司の男性が現れる。どこかへ電話をする。話がついたのだろう。ようやく受付通過。エレベータで3Fのクリストフの居室へ。10時。

12時半まで仕事をした後、隣室のパトリックを加え5人でデルフィーヌの車で昼食へ。近くの感じのいい小さなレストラン。僕は前菜にモッツェラチーズ、メインはステーキ。重い。ステーキがでかかった。デザートは他の4人はエスプレッソの周りに3種の小さなケーキがついた皿だったが、僕はエスプレッソだけにする。固形物はもう入らない。

フランスでは食事は必ずデザートかチーズで終わる。それなのに彼らは太っていない。なぜだとパトリックに聞いた。運動する、量は食べない、そしてゆっくり食べる。この最後が大きいのではないか。食事を開始してから満腹中枢が機能し始めるまでの20分の間に日本人は量を掻き込んでしまうが、ゆっくり時間をかけて食べれば量は入らない。最近のメタボ関係の記事でも推奨される食事方法だが、僕は今から始めても効果があるのかね。

彼らはしゃべり続ける。沈黙は嫌われる。沈黙は「天使が通る」と言われる、と昔本で読んだことがある。

昼食の会計は会社持ち。外へ出たのは2時半。仕事場に戻る。

クリストフは今日の19時シャルル・ド・ゴール

空港からプラハへ3日間の出張へ出かけることになっている。僕らの飛行機は20時同じくシャルル・ド・ゴール発なので空港まで同行することにする。職場を出る時刻を4時と決め、それまでY君と僕とは時間つぶしに散歩。フォンテネ・オ・ローズは坂が多い街だ。

4時、デルフィーヌの車にクリストフ、プラハに同行する彼の同僚ひとり、そして僕ら二人が乗り、RER³フォンテネ・オ・ローズ駅へ向かう。途中、クリストフは荷物を取りに自宅近くで降り、僕は駅へ。ここでデルフィーヌとはお別れだ。日曜日と今日とよくしてくれた。

駅舎は改装されて日が浅らしくこざれいで、切符は全部自販機で改札も自動。やたら親切な太った女性の駅員が切符の買い方から改札まで(フランス声で)教えてくれる。パリ市内の南側にあるフォンテネ・オ・ローズ駅からはるばる北のシャルル・ド・ゴール空港まで10 Euro (¥1,500)。反対側のプラットホームまでエレベータで渡る。上から眺めていたらクリストフが小さな旅行荷物をもってプラットホームに入って来るのが見える。自宅はえらく近いらしい。

乗り込んだ電車では席に座れた。パリにある国際機関に派遣されている同期のY₂君に電話を入れる。彼は偶然今日休暇で日本へ戻るということを日本を発つ前に知っていた。バスで空港に向かっている、あと20分くらいで着くだろう、19時発の飛行機とのこと。できれば空港で会いましょうと。

電車は北上しパリ中心街に向かうにつれだんだんと乗客が増えてきた。いつのまにか電車は地下に潜っていた。ダンフェール・ロシュローとかいう駅で、空港へ向かう電車に乗り換える。プラットホームの電光掲示板に駅名が並べてあり、電車の進行方向の停車駅にランプがつく。これはわかりやすい。

ダンフェール・ロシュロー駅はモンパルナス墓地の近く、十分パリ中心街に近くおまけにそろそろラッシュ・アワーにかかる。続くポール・ロワイヤル駅、ルクサンビュール駅を経て、次のサン・ミッシェル駅とその次のチャトレ・レ・アル駅はセーヌ河を挟んだパリのど真ん中の駅。すさまじく乗り込んでくる。ぎゅうぎゅう詰め。東京のラッシュ時と同じようなものだ。殊に僕らは大きな荷物を持っていて申し訳ない。

この間に携帯電話が鳴る。ぎゅうぎゅう詰めで左手が自由に動かさず電話に出るまでに時間がかかる。Y₂君からだ。彼はターミナル2なので、今からシャトルバスでターミナル1に向かおうと思うがどうかと。僕らの電車はまだパリ市内を走っており、あと30分くらいはかかりそう。ターミナル間を移動して

会っている時間はないだろうということになり、空港で会うことは断念。

パリ市街を抜けると徐々に乗客は減っていき、電車は再び地上を走る。そして近代的な空港ターミナル2駅へ滑り込む。僕は、荷物が重いという理由で、空港ーパリ市内は今までいつもタクシーだった。今回RER初体験。日本の旅行書での悪評ほど印象は悪くない。むしろ便利。しかし乗客が少ない夜間は金品をとられるくらいは覚悟せよと。乗客が多い時間帯は問題ないと思う。今後使おう。同行のKさんとI君もRERで空港に来ているはず。

ターミナル2駅から再び5分ほど無人運転のモノレールに乗りターミナル2へ。サテライト4の全日空カウンターでチェックイン。長い長いエスカレーターで上へ上がり、パスポートコントロールを通過して土産物屋群。何も買う気はないけれど往復1回見て回る。同行のKさんは家族から何か変わったものと言われ、パンの形の文鎮を買っていた。気に入ってくれただろうか。それとも手にとって一瞥されただけだろうか。

荷物検査通過。一時よりは厳しくないが相変わらずズボンのベルトは抜くよう求められる。女性は靴まで脱がされていた。

今度の飛行機の席は通路から2列目。来るとき聴いた立川志の輔の『新・八五郎出世』をもう一度聴く。何度聞いても泣けますなあ。

それから映画3本見るぞ、と張り切ったのだが、最初の『オーシャンズ13』を食事をしながら見ていて、食事が終わったところで睡魔に襲われる。気がついたら食器が片付けられていた。まず問題はその映画が日本語吹き替えだったこと。アル・パチーノのあのしやがれた声は聞けず幻滅。吹き替え版でない画面への切り替えの仕方がわからなかったのだ。

とにかくよく寝た。トイレにも立たなかった。2度の食事はしっかり。

9月26日(水) 成田曇り

予定時刻より10分ばかり早く14:10に着陸。

荷物を確保し、税関検査を通過してから水戸駅南口までのバスの切符を買う(¥3,000)。16:00発まで1時間半。

携帯電話を返却。日本語、英語ペラペラのインド人らしき青年が対応。請求は約2週間後に郵送で通知。それまで金額もわからない。

今回の旅行では現金10万円はすっかり使ってしまった。Y君に借りていた9/23夕食代やタクシー代などを返そうと銀行のキャッシュ・ディスペンサーで日本円を引き出したいが、到着ロビーになかなか見あたらない。インフォメーションカウンターで聞いてようやく京葉銀行へ。VISAカード3枚とも使えず。1枚は暗誦番号覚え違い。2枚は「このカードは使えません。」(後に水戸市内では使用可であることがわかった。成田空港の京葉銀行に限って×か?)

³ RER エル・ウー・エル。高速郊外地下鉄。パリ交通公団(RATT)とフランス国鉄(SNCF)の共同経営。シャルル・ド・ゴール空港やベルサイユなど郊外に便利。パリ市内は地下、郊外は地上を走る。

I 君は明日福岡での研究会の初日に出番とのことで、バスを待つ間もパソコンで発表資料作成。僕は2日間出勤して最終日の29日(土)に福岡日帰りの予定。

なんだかんだとしているうちにバスの出発時刻が近づく。バス停に出向くとすでにS君とY君が列に。そのうちI君とKさんが集まってきた。

バスに乗り込むと偶然にY₂君と会う。前後の席で近況など話す。家族はすでに行く3月に帰国し、現在はパリに単身赴任中とのこと。任期は残り半年。

午後6時に水戸駅南口に到着して今回の旅行は終わり。

今回もまた天気に恵まれ、盗難にも遭わず、何より。

決算報告 (Euro)

交通 337	ローズライナー2回	¥6,000	食費 178	ビール	5.20	
	フランクフルト-ケルン鉄道	56.00		Chez Leon	35.00	
	デュッレン駅までタクシー	27.50		フレンチフライ	2.50	
	デュッレン-ブリュッセル鉄道	32.00		チキンサンドイッチ とマフィン	6.20	
	ブリュッセル駅からタクシー	11.20		ムール貝	27.00	
	ブリュッセル-ブリュージュ往復鉄道	12.80		デルフィーニと夕食	102.00	
	ブリュッセル-パリ北駅列車	78.00		その他 73	地図	8.00
	パリ北駅-ホテル タクシー	25.40			絵はがき	42.00
	サクレ-フォンテネ タクシー	43.00			インターネット	20.90
シャルル・ド・ゴール空港まで RER	10.00	駅のトイレ	0.40			
みやげ	チョコレート	43.00	宿泊費 577	水	1.60	
合計	1,208 Euro (国際携帯電話含まず)			ユーリッヒ	201.00	
				ブリュッセル	198.00	
			パリ	178.00		